



## 一 人生のスタート

---

今、まさに、ピストルの手が上げられた。スタートの瞬間だ。直人は大きく深呼吸をする。右隣にはゴリラこと、荒木先輩。左隣にはひまわり娘こと、中山先輩。あれから六年後、再び、一緒に走れるとは思わなかった。直人は左手首に着けた時計に右手の指をのせた。時計はストップウォッチの仕様に切り替えている。これでいつでもスタートできる。初めてのフルマラソン。緊張する。四二・一九五キロ。そんなに長い距離を完走できるのか。練習では三十キロは走った。その時は、途中で膝や股関節が痛くなり、試走だが途中でやめようと思った。それなのに、今回は更に十二キロも遠くに走らなければならない。本当に大丈夫だろうか。不安感しか増さない。

両隣の先輩のうち、荒木先輩は、高校時代と同じように、ランシャツ、ランパン、ソックス、シューズも黄色一色のいでたち。顔は相変わらず黒い。服の黄色と肌黒さで、遠目にはトラのように見える。だが近づいて顔を見るとゴリラだ。表情はいつもポーカーフェイスで平然としている。中山先輩も、高校時代と趣味が変わらないのか、全身ピンク色で統一している。おまけに、頬までほんのりピンク色だ。その真ん中の直人は青色一色だ。別名信号機トリオ。本来ならば、赤は途中でストップして、黄色は要注意。青色だけがいけいけゴーなのだが、実際は違う。他の二人は自信満々。直人だけが不安満々。直人があれこれ考えているうちにピストルが鳴った。バン。

「さあ、いくぞ」荒木先輩がローの声で呟いた。「ええ、いくわよ」中山先輩はトップのキーで気合を入れた。「何とかなる」直人はニュートラルの気持ちで唇を噛んだ。こうして信号機トリオはマラソンのスタートを切った。

高校時代は陸上部なのか、山岳部なのか、トレイルラン部なのか、荒木先輩や中山先輩と一緒に山の中や公園、砂浜などを走り回っていた。大学時代は、県外の大学に行き、走ることはやめ、芝居にのめり込んでいた。卒業後は、劇団の主宰者であり演出家が亡くなったことで、これから何をしていけばいいのかわからなくなった。そこで、二年間ほど、全国のリゾート地のホテルや民宿等でアルバイト生活を送った。

だが、いつまでもフラフラしている訳にもいかないのだから、地元に戻り、猛勉強をして市役所に就職した。都会で就職した友人たちに比べると、通勤時間は短く、時間には余裕がある。だが、走ることはしなかった。走ることは面白かったけれど、きつい練習が嫌だったからだ。だからと言って、仕事に賭けているのかと問われれば、首をひねるしかない。特にやることなく、高校時代によく練習した中央公園に仕事帰りに寄ってみた。

公園はあの頃と変わらない。真ん中が芝生で、その芝生を取り囲むようにして、土の道があり、そこが直人たちの練習場の一つだった。学校の運動場にもトラックがあったが、ハンドボール部など他の部と共有で使用するので、思うように時間がとれない。だから、直人たちは、学校からすぐ東側にある中央公園を利用していた。一周約五百メートル。一見、平地のようだけど、若干、登り、下りの坂となっていて、それがスピード練習には適していた。他の高校の陸上部もやっ

てきては走っていた。

しかし、直人たちのホームグラウンドはここから約二キロ先の山だ。標高二百メートル程度だが、ほぼ海拔ゼロメートルから急登の岩山だ。息を切らして登ると、頂上の展望台からは市内が一望できる。目の前には瀬戸内海が広がり、いくつかの小島が浮かび、フェリーなどの船が往来している。ガスがかかっていなければ、この四国と本州を結ぶ瀬戸大橋が見える。夕方になると、大学生や高校生のヨットが帆をたなびかせて海の上を疾走していた。同級生にヨット部員がいた。真っ黒な顔で、インターハイを目指しているんだ、と笑った顔が今でも忘れられない。直人の頭の中に、高校時代の様々な風景が浮かんだ。彼ら、彼女らは、今頃、何をしているんだろう。

その時、目の前をランナーが走っていく。突然、そのランナーが止まった。そして、振り返った。

「直人。直人か」高校時代の風景が蘇るととともに、声が3D画面から飛び出してきた。

「荒木先輩」直人は条件反射のように声が出て、立ち上がった。

「久しぶりだな。元気か」顔からは高校時代の時と同じように汗が吹き出している。まさか、同じ汗ではないだろう。直人はその時の汗は既に枯れ果てていた。

「はい。先輩こそ、相変わらず、元気そうですね」

「まあな。俺には元気しか取り柄がないんだ。あっはっはっは」笑い声も笑い方も昔のままだ。頭の中がスピーカで唸っている。

「ところで、お前。こんなところで何をしているんだ」

「先輩こそ、何をしているんですか」

「この格好見れば、わかるだろ。走っているんだ」昔からの黄色いTシャツと黄色い短パンだ。懐かしい。まさか、あの頃のユニフォームじゃないだろう。直人が愛用した青色のランパンとランシャツは実家の押し入れの中にあるはずだ。だが、もう、何年も身につけたことはないし、見たこともない。

「まだ、やっているんですか」

「まだとは何だ。まだとは。あの頃、小天狗にはなれたかもしれないが、まだ、天狗になれていないからな。だから、練習を続けているんだ」

「すごいですね、先輩」

「何もすごくないぞ。さっきも言ったように、俺にはこれしかないからな。今、県庁にいるんだ。お前は？」

「僕は市役所です」

「そうか。それならこれからもいろいろと仕事でも関係してくるな。それから、中山も地元に戻っているぞ」

「中山先輩もですか？」

「そうだ。高校の教師だ。まあ、あいつは昔からしっかりしていたからなあ。それに、赴任先の高校で、陸上部を勝手にテング部と名前を変えて、そこの顧問になっている。それこそ、俺以上に走り回っているぞ」

「ええ。テング部ですか」

確かに、中山先輩は、服装こそ、ピンク色で統一されていたけれど、頭の中はしっかりしていて、副部長なのに、部長の荒木先輩を尻に敷いていた。いわゆるカカア殿下だ。

「懐かしいですね。また、三人で会いたいですね」直人は社交辞令のつもりで軽く言う。

「そうか。それなら、早速会おう。携帯の電話を教えてくれ」荒木先輩は動きが早い。昔と同じだ。「はい」直人は荒木先輩に携帯から電話をする。先輩の着信音が鳴る。ダダダン、ダダダン、ダダダダダダン。どこかで聞いた音楽だ。

「先輩。その着信音は？」キングコングでも、ドンキーコングの曲局でもなかった。

「これか。知っているのか。ゴジラのテーマ曲だ。最近映画がヒットしただろう。この曲を聞くとじっとしてられなくなり、走り出したくなるんだ」ゴリラ顔の先輩がドヤ顔をした。

「じゃあ。また、連絡するぞ」荒木先輩はそう言い残すと、高校時代と同じように、中央公園から峰山に向かって走り始めた。直人は夕陽の赤と黄色いユニフォームの後ろ姿をじっと見つめていた。その両方の色は今の直人の目に沁みた。

「カンパイ」三つのグラスがカチ、カチ、カチンと音を立てた。

「久しぶりね」中山先輩の顔がひまわりになる。

「六年ぶりかな」荒木先輩がぐいっとグラスを一気に飲み干した。「うめえ」ゴリラがヤギになった。

「荒ちゃん。飲み放題だからといってペースが少し早いんじゃない？」と、中山先輩が突っ込みながら「お代わり」と空のグラスを差し出す。直人は「すみません。生ビールのお代わりをお願いします」と大声を上げた。

「いやあ。まさか三人で飲めるとは思わなかったよ」荒木先輩が二杯目のグラスを空けた。

「そうね。それは荒ちゃんのおかげね。感謝するわ」中山先輩も二杯目のビールを飲み干した。

「すみません。生ビールのお代わりをお願いします」直人が再び叫んだ。ペースが早い。早すぎる。直人はまだ一杯目が半分残っている。

「人の心配をするよりも、直人、お前も飲めよ」荒木先輩の声はもともと大きいのに更に鼓膜を大きく震わす。

「そうよ。直人君も飲みなさいよ」中山先輩の顔は服と同じようにピンク色に染まる。ピンクのひまわりだ。

「はい」と言いながら、二人の先輩のお酒のペースにはついていけそうにない。高校時代に山の中を走るのにも二人についていけなかったが、社会人になってもやはり同じだ。わずか一歳しか年齢は違わないはずなのに、やはり先輩は先輩だ。変に納得する。

「それで、直人は何をやっているんだ」荒木先輩は三杯目のグラスを掴んだ。

「市役所に勤務しています。グビ」直人はようやく一杯目のグラスを開けた。

「そんなこと聞いてんじゃないの。仕事じゃなく、プライベートよ」中山先輩も三杯目に口をつけた。

「今は何もしていません。お代り」直人は二杯目のグラスを掴んだ。それでも一周遅れだ。

「よし。それなら、信号機トリオの復活だ」

「そうね。復活ね」

荒木先輩と中山先輩は四杯目に突入する。差は埋まるどんどん離されるばかりだ。後ろ姿が遠のいて行く。

「復活って、何を復活ですか」直人は二人のアルコールの毒気にやられっぱなしだ。

「きまっているだろ。天狗になるんだ」

「そうよ。天狗よ」

高校時代、「君も天狗になろう！クロススポーツ部」という新入生勧誘のチラシを思い出した。

「高校時代は、小天狗にしかなれなかったから、社会人になったからには本物の天狗になるんだ」

「そうよ。本物の天狗になるのよ」

荒木先輩と中山先輩の鼻息が荒い。口からはアルコールの吐く息。ゴジラじゃないけれど口から火炎放射が出そうだ。

「天狗ですか？じゃあ、具体的に何をやるんですか」学生時代、二人の背中に必死で追いつこうとしたように、直人も二杯目のグラスを空けた。

「何を冷めたことを言うんだ。冷えてるのはビールだけでいいんだ」

「そうよ。あたしたちは天狗よ。できないことは何もないわ」

二人はどう見ても、天狗じゃなく大トラに変身している。特に、荒木先輩は黒い肌に黄色いTシャツを着ているので、ひとすじの虎に見える。

「やるぞ。フルマラソン」

「そうよ。百キロマラソンよ。ゴビ砂漠横断よ。地球一周よ」

同床異夢じゃないけれど、荒木先輩と中山先輩は同じ方向性だが、少し異なっている。どちらかと言えば、中山先輩の方がより過激だ。二人とも酔っている。この勢いの状態のまま、ここで、「そうだ。百キロマラソンだ」と直人が相槌を打てば、百キロマラソンを走る羽目に陥る。だからと言って、五キロや十キロで満足する二人じゃない。「何を甘ちゃんなことを言っているんだ」と罵倒されるのが落ちだ。そのため、直人はどちらかと言えばより過激度が少ないフルマラソンを相槌に選んだ。

「そりゃあ、フルマラソンですよ。でも、四二、一九五キロじゃないですよね？」それでも否定形で答える直人。

「そうだ。フルマラソンだ。まさかの四二、一九五キロだ。」

「そうよ。長距離マラソンよ。百キロよ」

「大会に出るぞ」

「大会に出るわよ」

「申し込みは」

「あたしがやっとく。三人分。まかしといて」

やはり思ったとおりだ。直人が恐る恐る尋ねた。

「三人には、僕も入るんですか？」

「当たり前だの」

「クラッカー」

荒木先輩と中山先輩はハイタッチをしている。向かい合っているけど、やはり、同じ方向性の性格だ。前しか向いていない。

「僕、四年間、いや六年間、走っていないんですけど」困惑する直人。

「じゃあ」

「練習すれば」荒木先輩と中山先輩が何杯目かのジョッキを飲み干した。直人は二人が飲むビールのグラスを数えるのをやめた。いや。酔って、数えられなくなったのだ。先輩二人の二言で、懐かしの信号機トリオの初マラソンの参加が決まった。

多分、先頭を荒木先輩が走り、続いて、中山先輩。そして、最後は直人。高校生の時と同じだ。本当に、懐かしい。だが、懐かしがってばかりではいけない。これから、マラソンの地獄に出くわすのだ。だが、直人の頭の中に、あの懐かしい頃の映像、そう三人が山の中を走っている姿、が浮かび上がった。確かに酔っている。直人はそのまま眠ってしまった。